

平成 26 年 安孫子賞  
(昭和 35 年創設 第 55 回)

泉 吉廣 殿 (帯広市 有機農業経営)

昭和 52 年に就農、58 年に経営独立。平成元年から有機無農薬栽培に取り組み、平成 14 年に有機 JAS の認定を受ける。平成 12 年に指導農業士の認定、平成 10 年～25 年に帯広市農業委員を務めたほか、平成 18 年には帯広市川西農協理事に就任。20ha の経営面積の全てで有機農業を実践、ばれいしょ、にんじん、大豆、小豆およびたまねぎを基幹作物としつつ、キャベツ、かぼちゃ、ながいもおよび施設では葉菜類など多品目を少量生産し、その多くを産直で有利販売している。

長年にわたり大規模な緑肥導入を組み込んだ長期輪作体系による土作りに力を入れ、さらに新技術の導入を含む創意工夫によって栽培技術を向上させ、有機野菜の生産と産直による堅実な経営を確立するとともに、自らの栽培技術の公開や新規就農者の受け入れなど積極的に技術指導に取り組み、地域の担い手育成への貢献も大きい。

( 1 ) 有機農業の取り組み

昭和 63 年の冷害を経験して土作りの大切さを痛感し、学校給食の子どもたちに安心・安全な農産物を提供するために有機農業に転換した。経営面積の約 40% に緑肥作物を作付けし、長期の輪作体型を確保している。有機無農薬栽培を付加価値として、ばれいしょやにんじんなどを含む多品目の野菜を少量栽培し、インターネットなどを活用した産直販売による安定した経営を確立している。

( 2 ) 新技術の積極的な導入と技術の伝達

試験研究機関や農業改良普及センターと連携して、常に新しい技術を取り入れ、土作り技術などの向上に努めている。また、地区内外からの視察を多く受け入れるほか、自然農法技術交流会の講師を務めるなど、自らの栽培技術を公開して北海道の有機栽培技術の向上に貢献している。

( 3 ) 地域振興および担い手育成

平成 10 年に帯広市の農業委員に就任してから 5 期 15 年にわたって地域の代表として農業行政に寄与するとともに、地元農協の理事を務めるなどして地域の相談役としての役割を果たし、地域社会と農業の発展に貢献している。さらに、指導農業士として新規参入を目指す研修生の受け入れと指導に当たり、地域内外での新規就農者の定着に努めている。

平成 26 年 安孫子賞  
(昭和 35 年創設 第 55 回)

高橋 敏幸 殿 (共和町 農業技術指導)

昭和 42 年に宮城県農業短期大学を卒業後、49 年まで家業(農業)に従事、昭和 49 年から発足農協に就職し、平成 18 年に定年退職するまで一貫して営農指導部門に勤務する。平成 19 年からは共和町農業開発センターの技術指導員として現在に至る。

昭和 50 年代前半から農家の所得確保と水田利用再編対策として、作付けが増加したメロンとスイカのブランド化を地域の中心となっていち早く進めて、競合する他産地との差別化を図る一方、連作障害の回避技術としてのネギとの混植栽培や早期出荷のための前進栽培など、積極的な新技術の導入と推進に努め、産地の育成と農家の経営改善に貢献した。

(1)「らいでん西瓜」ブランドの育成と維持

出荷時期を早めるハウス栽培の導入や品種の絞り込みにいち早く取り組み、地域の選果場を統合して品質の高位安定に寄与するなど、一貫して生産組合の産地確立に向けた活動と営農技術指導を行ってきた。また、原子力環境センター農業研究科と連携してネギとの「混植スイカ栽培」を実施、継続することで、昭和 50 年代後半から被害が深刻化した連作障害の克服と生産性を維持に果たした役割が顕著である。

(2)「らいでんメロン」ブランドの育成

平成 4 年以降に畑地灌漑用水を利用することによるメロン作付け拡大を農家に進めるとともに、栽培技術を指導して農家所得の向上と経営の安定化に寄与した。また、それまで農協別に分かれていた銘柄を「らいでんメロン」として統一することに尽力し、生産者とともに道内一のブランドに発展させた。

(3) 地域農業振興

農協を退職後も、共和町農業開発センターの技術指導員として、スイカやメロンなどの品質や生産性向上を目指した品種試験、施肥試験や、灌水や換気などの作業の省力化を図る栽培試験などに取り組み、成果をあげている。気軽に技術支援や相談に乗ってくれることから生産者からの信頼も厚い。

平成 26 年 北農賞  
(昭和 15 年創設 第 75 回)

品種育成：水稲 「ふっくりんこ」の育成

受賞者名：宗形信也、品田裕二、田中一生、尾崎洋人、吉村 徹、鴻坂扶美子、  
萩原誠司 殿（地方独立行政法人 北海道立総合研究機構・農業研究本部）  
越智弘明、沼尾吉則、前田 博、佐々木忠雄、本間 昭（故人）、  
太田早苗 殿（退職者）

( 1 ) 北海道米の食味向上を目的として「優良米早期開発試験」が昭和 55 年に開始されて以降、「きらら 397」をはじめとする多数の品種が育成され、現在では「ゆめぴりか」、「ななつぼし」が日本穀物検定協会の食味ランキングで「特 A」と評価されるまでに、北海道米の食味は向上した。

( 2 ) 「ふっくりんこ」は平成 15 年に優良品種に認定され、北海道の良食味品種の中で唯一の晩生種である。その特徴は 良食味で低タンパクである 障害型耐冷性が強い、  
熟期は「きらら 397」よりも遅い晩生種 食味は「きらら 397」よりも明らかに優り、「ななつぼし」と同等のレベルである。

( 3 ) 平成 15 年から渡島中・南部および檜山南部で作付けが始まったが、良食味であることから生産者の作付け意欲も高く、平成 18 年以降は檜山北部および空知の気象条件が良い地帯にも作付け可能地域が拡大された。平成 25 年には全道で 7,000ha に達し、うるち米のシェアは 6.7%、第 4 位を占めている。道南地域においては、生産者や農協などの関係機関による「函館育ちふっくりんこ蔵部」の活動が展開され、道南地域を代表する品種となっているとともに、今後も北海道米のブランド力の向上と需要拡大に貢献することが期待される。

平成 26 年 北農賞  
(昭和 15 年創設 第 75 回)

論文：乳牛の乾乳期間短縮が乳生産に及ぼす影響（北農 第 81 巻 第 3 号 掲載）

受賞者名：中村 正斗 殿

（独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター）

（ 1 ）わが国のホルスタイン種乳牛は、遺伝的改良と飼養管理技術の改善によって産乳量が増大する一方で、乾乳期間をそれまでの分娩前 60 日間とした場合に、乾乳による疾病リスクが高まる個体が増加する傾向が生じている。酪農現場では乾乳の開始を遅くすることで対応しているが、乾乳期間を短縮することによって次乳期の乳量が減少することが問題となっている。そのため、次乳期の乳生産に影響することなく、乾乳期間を短縮できる技術の確立が求められてきた。

（ 2 ）本論文は実験的な手法で乾乳期間の長短が乳牛の生育や乳生産に及ぼす影響を調べ、乾乳期間を 30 日に短縮した場合に初産牛では次乳期の乳量に影響するが、2 産以上の乳牛では乳量および成分ともに影響は認められないことを明らかにした。このことは、分娩後の産乳性の維持や乾乳期管理の省力化など、酪農生産現場における問題解決につながる技術開発の成果である。

（ 3 ）本成果はこれまでの関連試験成績による結果と総合して、乾乳期間を短縮する場合に 40 日を推奨期間とする最新情報として酪農家に提示され、北海道酪農が抱える課題の解決に寄与するところが大きいと考えられる。

平成 26 年 北農賞  
(昭和 15 年創設 第 75 回)

品種育成：カボチャ 短節間性品種「TC2A」、  
「くりひかり」、  
「ジェジェ」、  
「ストライプペポ」

受賞者名：杉山慶太、嘉見大助、室 崇人、森下昌三、伊藤喜三男、野口裕司 殿  
(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター)  
渡邊春彦、勝又雅彦、早坂良晴、浜田佳子(株式会社 渡辺採種場)

(1) カボチャ栽培では、定植後の整枝と誘引や収穫作業に多くの労力を要しており、これらの作業における省力・軽作業化を図る上で、節間が伸びない短節間性は有用な形質である。これまでも短節間性を備えた品種は育成されているが、果実が低粉質で市場性に乏しいため、新たに商品性の高い短節間品種の育成に取り組んだ。

(2) その結果、高粉質で良食味の品種「TC2A」(2008年12月品種登録)、濃黄色で厚い果肉を有して多収の加工業務用品種「くりひかり」(2013年6月品種登録)、貯蔵後も品質が優れる多収品種「ジェジェ」(2013年7月品種登録出願)、殻がなくて食用にする種子を有するペポカボチャ品種「ストライプペポ」(2014年2月品種登録)が育成され、これらはいずれも短節間性を有する。

(3) 「TC2A」は「ほっとけ栗たん」の商品名で流通しており、恵庭市をはじめ全国で約180haで栽培されている。また、「ストライプペポ」は和寒町においてカボチャを用いた地域興しに貢献するなど、短節間性による省力・軽作業化のみならず、カボチャの新たな需要の掘り起こしに寄与するものである。